

# 『らいうんみどり』にかくされた

## 「さすがおねえさん」のなぞ

田澤 薫

子どもとの日常のなかで、互いにわかりあえない場面は思いのほか多い。はじめ、子どもがことばの獲得途上にあつた頃は、いずれことばさえ自由になれば思いを伝え合うことは容易だろうと思われた。けれどそのうちにわかつたのは、「言えるけど言わない、だけどわかつて」という大人の心模様を、彼らも持つのだということだけだっ

た。かわつて、五歳になる娘と私の間では、ただ読んであげる時間をとにもする道具だった本が、思いを託す仲立ちとしても活かされるようになってきた。本をめぐるなぞ解きはますます難しい、しかし楽しいものとなっている。娘は、四歳半のときに弟が生まれて姉になつた。私たち父母は仕事を持って忙しくしていて、

これまでも決して十分に相手ができていたわけではない。限られた父母との関わりをこれからは弟と分け合うことを考えると、どんなにか葛藤もあろうかと思われたが、娘は、心配された赤ちゃんがえりも弟へのやつかみも見せずにすんなりと弟との共存を受け入れたようだった。

そればかりか、娘は、彼女が生まれてから今までに私が慈しんできたとそっくりのやり方で、弟をかわいがった。丁度、字が読めるようになって喜びのまま本読みに熱中している時期でもあり、食事がおわったときなど私が片づけにたつと同時に「さあ、ご本でも読んであげましょうか」と自分の本棚に向かうことが日課になった。不思議なもの、まだ首もしっかりすわらないうちから弟は姉の読みきかせに熱心に応えた。時には赤ちゃん向けの本、でも大抵は姉の関心にあつた幼児向けの本。どう考えてもゼロ歳児向けの本では

なくとも、弟は、姉を見つめ、姉が見せてくれる本の頁を見つめ、おはなしにじいーつと耳を傾け、時々は唱和するように声を出してあきることがなかった。

そんなあるとき、ふと、娘が『らいおんみどりの日ようび』（中川李枝子さく 山脇百合子え 福音館書店）を繰り返して選んでいることに心がとまった。『らいおんみどり』は、物語本なので、絵は少なく、それも白黒ばかりという地味なつくりである。おまけにわが家の『らいおんみどり』は三十年近くも前に私が子どもだったときのものなので、全体的に古ぼけてページも黄ばんでいる。どう見ても、五歳児を惹きつける見栄えの本ではない。どうしてこればかり？ と不思議でならなかった。

もちろん『らいおんみどり』のおはなし自体が、娘は以前から大好きではあった。舞台は、う

たえみどりのしま”。同じ作者による『かえるのエルタ』にも登場する、緑色でトランプが好きなライオンのらいおんみどりと、ネコの姉弟のトロとトランベ、それに白クマのムクムクが、ある日曜日に出会ってサーカスをする物語だ。

ただ私には、この本のとりこになったおぼえない。子ども頃の記憶をたどると、『らいおんみどり』はきらきらして目眩がしそうだった。『かえるのエルタ』とは比較にならないくらい空想にとんだファンタジーに思われ、サーカスひと筋のトロ団長はエキセントリックな雰囲気、少し怖くさえあった。ところが大人になって読み返してみたら、登場人物（登場動物）にとつては「ゆめのような」出来事が描かれてはいるけれども……実際に日常的で他愛ないことの連なりでお話が構成されていて、ちょっと拍子抜けした。改めて考えてみれば、日曜日というのだから、私は共

働き家庭の子どもであったから、貴重な家族みんなの休日はそれだけでうっとりする要素は十分だったが、らいおんみどりとつてはせいぜいたてがみを洗う日にすぎない。サーカスだって、実際のところはサーカス遊び、サーカスごっこではないか。たとえば、物語のクライマックスのあたりで、らいおんみどりの頭にのつたみどりいろの帽子からトランプがこぼれおち、トロ団長が拾ってナツブザックに入れる場面はこうである。

まあ、トランプの雨。

あとから、あとからふつてきて、らいおんみどりは、目をあけることも、うごくこともできません。

とうとう、むねまでトランプにうまり、

「トロ団長、たすけてくれ。」

とさげびました。

ビーチパラソルの中から、トロが、青いナツブ

ザックをもってあらわれました。

トロは、トランプをいまいのこらずナップザックへ、ひろいあつめて、らいおんみどりへ、わたしました。

子どもの頃の私は、すっかり物語に引き込まれてサーカスのマジックにかかり、見物の動物たちと一緒に息を呑んだ。でも現実的に考えれば、一組分のトランプが頭上から落ちるのはあつという間で、それほど劇的ではない。確かに小さな子どもだとびっくりして目をつぶって「たすけて！」となるだろうけど……。一方でばらまかれたトランプを拾い集めるのには手間がかかる。見物客にまるめた背中を見せつつ地面に這いつくばってこネコがカードを拾う……。実は、何ともばつとしない場面ではなからうか。そうか、この本は、客観的に大人の理屈で考えれば特段すてきでないこ

とを、日曜日という設定とサーカスという素材のもつ魔術で飾り付けて、まばゆい光をあてて、目を眩ませていたのだな、と思いが当たった。幼いときの印象が強烈だっただけに、何だか肩透かしをくったような気にさせられた。

それなのに、どうして娘は『らいおんみどり』ばかり手にとるのだろうか。

翻って娘を思うと、まさに彼女は『らいおんみどり』の世界に生きている。椅子をひっくり返せば遠足バスになり、クッションを並べれば子ども部屋が動物園になる。ほんの一瞬のお店屋さんごっこのために延々と続ける準備の作業。折り紙や画用紙からあつという間にうまれる素敵な商品の数々……。そんな娘には、トロが屈んでトランプを拾い集める間の抜けた時間は一瞬に収斂されて、出し物の輝かしさを損なう問題にはなりえない。

娘は弟に読んで聞かせていた。

そのものすごい音に、さすがのおねえさんもミシンをやめ、かおをあげたかとおもうと、

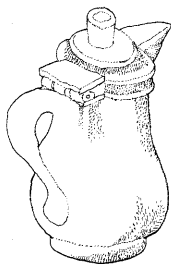
「おそかったわね。」

と、ふたりをにらみつけました。

「さすがのおねえさん」たるト口団長の台詞にさしかかるとき、娘は思い切り感情を込めて怖い声音で読み、その度に「えへへ」と照れ笑いをしていた。

なるほど、娘はト口団長なのか。娘にとつてはこの本の主人公はらいおんみどりではなく、サーカスが好きで、創意工夫に富んでいて、わがままなほどのリーダーシップを発揮するト口団長のなちがいない。姉ネコのト口とくらべて、弟ネコのトランベはいかにも情けない。身体がト口より

小さいばかりでなく、そっつかしくて、へまばかりしている。姉のいばりん坊ぶりを愚痴りながらも、お腹が空けば姉に頼り、姉の遊びの仲間に入ってもらおうと一生懸命になり、姉の姿が見えなくなつたときには無我夢中で「ねえさーん、ねえさーん」「あー、ほくのだいなねえさーん。」と空じゅうを探し回る。姉なしではいられない、誰よりも姉が好きなトランベにとつてト口は、かけがえのない姉貴なのである。娘が姉としての自分を思うとき、ひとつの手がかりとして想起されたのがト口団長だったのだろう。弟相手に繰り返す読み、その物語世界を弟と共有しようとするこゝとで娘は自分を支え、崩れないでト口のような「さすがのおねえさん」を生きる力を得て



## 同級生の小説

原田宗典 『十七歳だった！』 集英社文庫 他

大田清隆 『夕焼けの彼方に』 文芸社

山本 政人

いたのかもしれない。

トランプを拾い集めるトロのまるめられた背中  
の幼さに、いまの娘が気づくころはずはない。『ら  
いおんみどり』の魔法に満ちた幻想世界が、何の

ことはない若い人たちの日常そのものだというこ  
とに、昨夏の私はまだ思い至っていなかったのだ  
から。

(尚綱女学院短期大学)

面白い本が見つからない。書店に行けば、文字

通り山のように本があるが、そのなかから面白い

ものを見つけるのは至難の業である。

私はときどき自分で小説を書いてみるが、読む